

## 高野辰之と邦楽教育

大月 和彦

あるペンクラブの「なんでも書こう会」に、長い間続けた長唄の稽古を止めた経緯が紹介され、生活様式の洋風化に伴って長唄などはマイナーな音楽になり、「邦楽の衰退」が始まったという趣旨の文章があった。

小学唱歌「故郷」や「朧月夜」などの作詞者高野辰之の事績を調べていたら、高野がわが国の邦楽教育に大きな貢献していることを知った。

北信州の農家に生まれ、師範学校卒業後小学校で教師をしていた高野は、明治35年に上京し、国文・国語学者上田万年博士のもとで、浄瑠璃丸本や芝居台帳の目録を作成しているうちに浄瑠璃に関心を持つようになり、歌謡史や邦楽研究に発展したという。

上田博士の紹介で文部省属の職を得て、国語教科書の編纂に従事、やがて東京音楽学校の邦楽調査掛に嘱託として採用される。

明治20年に設立された東京音楽学校では、前身の音楽取調掛時代から洋楽と邦楽(能楽、箏曲、長唄)の教育が行われていたが、森有礼文相の欧化政策により邦楽部門が廃止された。

同じころ設立された東京美術学校の教育は日本画が中心だったのに対し、東京音楽学校は西洋音楽一辺倒で、邦楽部門の復活が要望されていた。明治40年、同校に邦楽調査掛が新設される。嘱託職員に採用された高野はここで史料の探訪、歌舞伎や浄瑠璃の研究に打ちこんだ。

当時の状況について高野は自著『日本歌謡史』の中で「政府は洋楽には熱心だが邦楽には熱意がない。調査しているだけで何もしていない。国立の音楽学校で洋楽教育だけ行われている。同校勤務の外国人教師になぜ自国の音楽を教えないのかと不思議がられる。邦楽は成り行き任せという考えは残念」とふりかえっている。

大正9年に東京音楽学校教授専任となり、教科書編纂の仕事から「解放」され、講義や研究に専念する。昭和11年60歳で退職する。この間邦楽科の設置に奔走、退職直後の同11年6月に懸案だった邦楽科が設置された。

小学唱歌の作詞者として知られる高野辰之のもう一つの面があった。